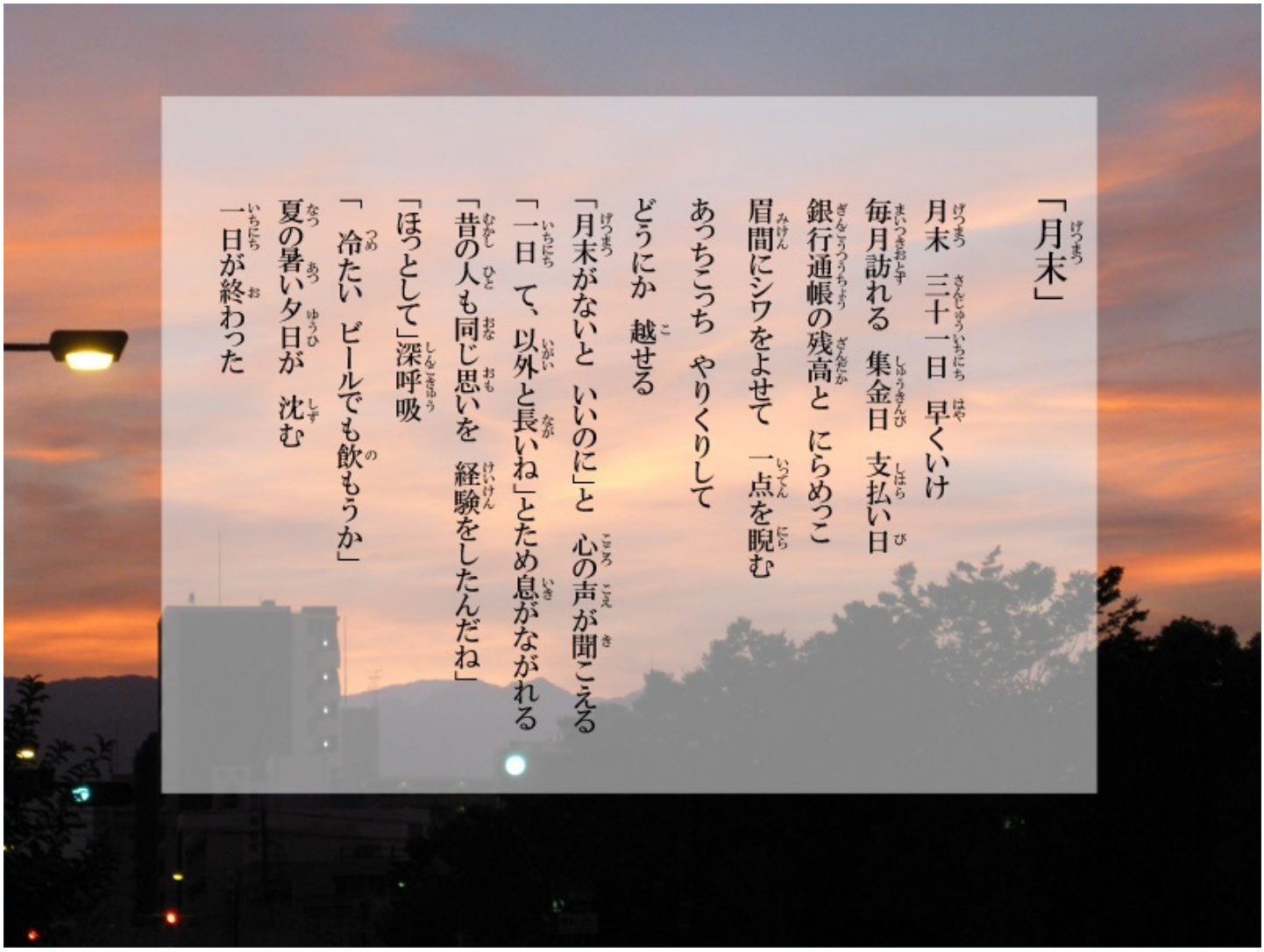
せいけん詩集

第二十一篇

作：近藤せいけん

おい～雲よ

「おい～そこの雲よ」
「この俺のことか」
「そうだ。この俺様の上に　のほほんと浮かんでいる　お前だ」
「何だ？」
「何で、この俺様の上を　飛ぶんだ」
「え、面白いことを言う　ヤツだ」「そんなこと言うヤツ　初めてだ」
「そう言うお前は　何者だ」
「俺様のことか　天空の王　わし様じゃ」
「そう　わし様か」
「俺様より　高く飛ぶヤツは面白くない」
「へェ～　お前様はずいぶん　変わっているな」
「俺は飛んでいるのではない。ただ流れているだけじゃ」
「流れている？　飛んでいるんじゃないのか？」
「そう　風に吹かれて・・・」
「お前は　自分でどこにも自由に　行けるけど
俺はどこに行くか決められない」
「それに　だんだん　変わってゆく　やがて無くなる・・・」
「だから　今が一番　のほほんとしていられるのだ」
「　そうか。そうなのか。　お前て悲しいヤツだな」



「月末」

月末　三十一日　早くいけ
毎月訪れる　集金日　支払い日
銀行通帳の残高と　にらめっこ
眉間にシワをよせて　一点を睨む

あっちこっち　やりくりして
どうにか　越せる
「月末がないと　いいのに」と　心の声が聞こえる
「一日　て、以外と長いね」とため息がながれる
「昔の人も同じ思いを　経験をしたんだね」
「ほっとして」深呼吸
「　冷たい　ビールでも飲もうか」
夏の暑い夕日が　沈む
一日が終わった